

彌次行

泉鏡花

青空文庫

今いまは然さる憂きづ慮かひなし。大塚おほつかより氷川ひかはへ下おりる、たら／＼坂ざかは、恰あたかも芳野世經氏宅よしせいきいしたくの
 門もんについて曲まがる、昔むかしは辻斬つじざりありたり。こゝに幽靈坂いうれいざか、猫又坂ねこまたざか、くらがり坂ざかなど謂いふ
 あり、好事かうずの士しは尋たづぬべし。田圃たんぼには赤蜻蛉あかとんぼ、案山子かゝし、鳴子なるこなどいづれも風情ふぜいなり。天
 麗うらかにして其幽靈坂そのいうれいざかの樹立こだちの中に鳥なかとの聲こゑす。うになるね、と知しつた振ふりをして聲こゑを懸かくれ
 ば、何なにか心得こころえたる様子やうすにて同行どうかうの北八きたはちは腕組うでぐみをして少時しばらくだま黙まる。
 氷川神社ひかはじんじやを石段いしだんの下したにて拜をがみ、此宮このみやと植物園しよくぶつゑんの竹藪たけやぶとの間の坂あひださかを上のぼりて原は
 町らまちへ懸かれり。路みちの彼方あなたに名代なだいの護謨製造所ごむせいざうしよのあるあり。職人しよくにん眞黒まつくろになつて働はたらく。
 護謨ごむの匂面におもてを打うつ。通り抜ぬければ木犀もくせいの薰高かをたかき横町よこちやうなり。これより白山はくさんの裏うらに出い
 でて、天外君てんぐわいくんの竹垣たけがきの前まへに至いたるまでは我々われ／＼これを間道かんだうと稱となへて、夜よるは犬いぬの吠ほゆる
 難處なんしよなり。件くだんの垣根かきねを差覗さしのぞきて、をぢさん居ゐるか、と聲こゑを懸かける。黄菊きぎくを活いけたる床とこ
 の間まの見透みとほさるゝ書齋しよさいに聲こゑあり、居ゐる／＼と。
 やがて着流しきなが懷手ふところにて、冷さうな縁側えんがはに立たち顯あらはれ、莞爾にっことして曰いはは、何處どこへ。
 あゝ北八きたはちの野郎やらうとそこいらまで。まあ、お入はいり。いづれ、と言いつて分わかれ、大乘寺だいじようじの坂さか
 を上のぼり、駒込こまごめに出いづ。

料理屋萬金の前を左へ折れて眞直に、追分を右に見て、むかうへ千駄木に至る。
 路に門あり、門内兩側に小松をならべ植ゑて、奥深く住へる家なり。主人は、
 巢鴨邊の學校の教授にて知つた人。北八を顧みて、日曜でないから留守だけれど
 も、氣の利いた小間使が居るぜ、一寸寄つて茶を吞まうかと笑ふ。およしよ、と苦い
 顔をする。即ちよして、團子坂に赴く。坂の上の煙草屋にて北八嗜む處のパイレー
 トを購ふ。勿論身錢なり。此の舶來煙草此邊には未だ之れあり。但し濕つて味可なら
 ず。

坂の下は、左右の植木屋、屋外に足場を設け、半纏着の若衆蛛手に搦んで、造
 菊の支度最中なりけり。行く／＼と古道具屋の前に立つ。彌次見て曰く、茶棚
 はあんなのが可いな。入らつしやいまし、と四十恰好の、人柄なる女房奥より出
 で、坐して慇懃に挨拶する。南無三聞えたかときよつとする。爰に於てか北八大
 膽に、おかみさん彼の茶棚はいくら。皆寒竹でございます、はい、お品が宜しうご
 ざいます、五圓六十錢に願ひたう存じます。兩人顔を見合せて思入あり。北
 八心得たる顔はすれども、さすがにどぎまぎして言はむと欲する處を知らず、おかみ
 さん歸にするよ。唯々。お邪魔でしたと兄さんは旨いものなり。虎口を免れたる顔色

の、何うだ、北八きたはち恐入おそれいつたか。餘計よけいな口くちを利きくもんぢやないよ。

思おもひ懸がけず又露地またろぢの口くちに、抱かゝ餘へあまる松まつの太木たいぼくを筒切つぎりにせしよと思おもふ、張子はりこの恐おそろし

き腕かひはつぽん一本にぐるま、荷車にぐるまに積置つみおいたり。追おつて、大江山おほえやまはこれでござい、入いらはいいくと言いふ

なるべし。

笠森かさもりいなり稻荷いなりのあたりを通とほる。路傍みちばたのとある駄菓子屋だぐわしやの奥おくより、中形ちうがたの浴衣ゆかたに繻子しゆすの

帯おびだらしなく、島田しまだ、襟白粉えりおしろい、襷たすきがけなるが、緋禪ひこんを蹴返けかへし、ばたくと駈かけて出いで、

一寸ちよつと、煮豆屋にまめやさんく。手てには小皿こざらを持ちたり。四五軒行過しごけんゆきすぎたる威勢ゐせいの善よき煮豆屋にまめや、

振返ふりかへりて、よう！と言いふ。

そら又化性またけしやうのものだと、急足いそぎあしに谷中やなかに着つく。いつも變かはらぬ景色けしきながら、腕うでと島田しまだ

におびえし舉句あげくの、心細こころぼそさいはむ方かたなし。

森もりの下したの徑こみちを行ゆけば、土濡つちぬれ、落葉おちばしめ濕しめれり。白張しらはりの提灯ちやうちんに、薄うすき日影ひかげさすも物もの

淋びし。苔蒸こけむし、櫛しき枯かれたる墓はかに、門もんのみいかめしきもはかなしや。印しるしの石いしも青あをきあり、

白しろきあり、質滑しめづかにして斑ふのあるあり。あるが中なかに神婢しんびと書かいたるなにがしの女ぢよが耶蘇やそ教徒けうと

の十字形じふじがたの塚つかは、法のりの路みちに迷まよひやせむ、異國いこくの人の、友ともなきかと哀深あはれし。

竹たけの埒結らちゆひたる中なかに、三四人土さんよにんつちをほり居ゐるあたりにて、路みちも分わからずなりしが、洋服やうふく

着たる坊ちやん二人、學校の戻と見ゆるがつかくと通るに頼母しくなりて、後をつけ、やがて木の間に立つ湯氣を見れば掛茶屋なりけり。

休ましておくれ、と腰をかけて一息つく。大分お暖でございますと、婆は銅の大藥

罐の茶をくれる。床几の下に俵を敷けるに、犬の子一匹、其日の朝より目の見ゆる

ものの由、漸と食づきましたとて、老年の餘念もなげなり。折から子を背に、御新造一

人、片手に蝙蝠傘をさして、片手に風車をまはして見せながら、此の前を通り行

きぬ。あすこが踏切だ、徐々出懸けようと、茶店を辭す。

何うだ北八、線路の傍の彼の森が鶯花園だよ、晝に描いた天女は賣藥の廣

告だ、そんなものに、見惚れるな。おつと、また其古道具屋は高さうだぜ、お辭儀をさ

れると六ヶしいぞ。いや、何か申す内に、ハヤこれは笹の雪に着いて候が、三時すぎにて

店はしまひ、交番の角について曲る。この流に人集ひ葱を洗へり。葱の香の小川に流れ

とばかりにて句にはならざりしが、あゝ、もうちつとで思ふこいはぬは腹ふくるゝ業よ

といへば、いま一足早かりせば、笹の雪が賣切にて腹ふくれぬ事よといふ。さあ、じ

ぶくらずに、歩行いたく。

一寸伺ひます。此路を眞直に參りますと、左様三河島と、路を行く人に教へら

れて、おやくと、引返し、白壁の見ゆる土藏をあてに他の畦を突切るに、ちよろゝ
 水のある中に紫の花の咲いたる草あり。綺麗といひて見返勝、のんきにうしろ歩行を
 すれば、得ならぬ臭、細き道を、肥料室の挾撃なり。目を眠つて呐喊す。既にし
 て三島神社の角なり。

亡なつた一葉女史が、たけくらべといふ本に、狂氣街道といったのは是から前だ
 さうだ、うつかりするな、恐しいよ、と固く北八を警戒す。

やあ汚え溝だ。恐しい石灰だ。酷い道だ。三階があるぜ、浴衣ばかりの土用干か、
 夜具の裏が眞赤な、何だ棧橋が突立つてら。叱！黙つてくと、目くばせして、衣

紋坂より土手に出でしが、幸ひ神田の伯父に逢はず、客待の車と、烈しい人通
 の眞晝間、露店の白い西瓜、埃だらけの金鰐焼、おでんの屋臺の中を抜けて柳の

下をさつくと行く。實は土手の道哲に結縁して艶福を祈らばやと存ぜしが、ま
 もに西日を受けたれば、顔がほてつて我慢ならず、土手を行くこと纔にして、日蔭の田町

へ遁げて下りて、さあ、よし。北八大丈夫だ、と立直つて悠然となる。此邊小ぢ
 んまりとしたる商賣の軒ならび、しもたやと見るは、産婆、人相見、お手紙したゝ

め處なり。一軒、煮染屋の前に立ちて、買物をして居た中年増の大丸鬘、紙あま

た積つんだる腕車くるまを推おして、小僧こぞう三人向さんうより來懸きかりしが、私語しごして曰いはく、見みねえ、年ねん明けだど。

路みちに太郎稻荷たらういなりあり、奉納ほうなふの手拭堂てぬぐひだうを蔽おほふ、小鳥居ちきとりゐ夥多おびたし。此處こゝ彼處かしこ露地ろぢの日ひあたりてならひぎやうし、ほ、奉納ほうなふの手拭堂てぬぐひだうを蔽おほふ、小鳥居ちきとりゐ夥多おびたし。此處こゝ彼處かしこ露地ろぢの日ひあたりてならひぎやうし、ほ、奉納ほうなふの手拭堂てぬぐひだうを蔽おほふ、小鳥居ちきとりゐ夥多おびたし。此處こゝ彼處かしこ露地ろぢの日ひあ

天まうに詣まうづ。

本堂ほんだうに額ぬかづき果はてて、衝つと立ちたて階きざの方に歩あゆみ出いでたるは、年紀としはやう／＼二十はたちばかりと覺おぼしき美人びじん、眉まゆを拂はらひ、鐵漿かねをつけたり。前垂まへだれがけの半纏はんてんぎ着はだし、跣足はだしに駒下駄こまげたを穿はかむとして、階下かいかについて居ゐる下足番げそくばんの親仁おやちの伸のびをする手に、一寸握ちよつとにぎらせ行く。親仁おやちは高たか／＼と押おしいたぎ、戴まいき、毎度まいど何なんうも、といふ。境内けいだいの敷石しきいしの上うへを行ゆきつ戻もどりつ、別べつにおひやくど、百度ひやくどを踏み居ゐるは男女なんによふたり二人なり。女をんなは年紀とし四十しじふばかり。黒縮緬くろぢりめんの一ツ紋ひともんの羽織はおりを着きて足袋たびはだし、男をとこは盲めくら、縞めくらの腹掛はらがけ、股引もゝひき、彩いろどりある七福神しちふくじんの模様もやうを織おりたる丈長たけながき刺子さしこを着きたり。これは素跣足すはだし、入交いりちがひになり、引違ひきちがひ、立交たちかはりて二人ふたりとも傍目わきめも觸ふらず。おい邪魔じゃまになると悪いよと北八きたはちを促うながし、道みちを開ひらいて、見晴みはらしに上のぼる。名なにし負おふ今戸いまどあたり、船ふねは水みづの上うへを音おともせず、人ひとの家いへの瓦屋根かはらやねの間あひだを行交ゆきかふ様手さまてに取るとばかり。水みづも青あをく天てんも青あをし。白帆しらほあちこち、處々ところ／＼煙突えんとつの煙けむりたなびけり、振ふりさけ見みれば雲くももな

きに、傍には大樹蒼空を蔽ひて物ぐらく、呪の釘もあるべき幹なり。おなじ臺に向
 顧卷したる子守女三人あり。身體を揺り、下駄にて板敷を踏鳴らす音おどろ
 〱し。其まゝ渡場を志す、石段の中途にて行逢ひしは、日傘さしたる、十二ばかりの
 友禪縮緬、踊子か。

振返れば聖天の森、待乳沈んで梢乗込む三谷堀は、此處だ、此處だ、と今戸の
 渡に至る。

出ますよ、さあ早く。彌次舷端にしがみついてしやがむ。北八悠然とパイレ
 ートをくゆらす。乗合十四五人、最後に腕車を乗せる。船少し右へ傾く、はツと思ふと
 少し蒼くなる。丁と棹をつく、ゆらりと漕出す。

船頭さん、渡場で一番川幅の廣いのは何處だい。先づ此處だね。何町位
 あるねといふ。睡乾きて齒の根も合はず、煙管は出したが手が震ふる。北八は、にやり
 く、中流に至る頃ひ一錢蒸汽の餘波來る、ぴツたり突伏して了ふ。危えといふは
 船頭の聲、ヒヤアと肝を冷す。圖らざりき、急かずに二の句を續けるのを聞いて、
 目を開けば向島なり。それより百花園に遊ぶ。黄昏たり。
 萩暮れて薄まばゆき夕日かな

言ひつくすべくもあらず、秋草の種々數ふべくもあらずかし。北八が此作の如きは、園内に散ばつたる石碑短冊の句と一般、難澁千萬に存するなり。床几に休ひ打眺むれば、客幾組、高帽の天窓、羽織の肩、紫の袖、紅の裙、薄に見え、萩に隠れ、刈萱に搦み、葛に絡ひ、芙蓉にそよぎ、靡き亂れ、花を出づる人、花に入る人、花をめぐる人、皆此花より生れ出でて、立去りあへず、舞ひありく、人の蝶とも謂ひつべう。

などと落雁を囓つて居る。處へ！供を二人つれて、車夫體の壯俊にでつぷりと肥えた親仁の、唇がべろ／＼として無花果の裂けたる如き、眦の下れる、頬の肉掴むほどあるのを負はして、六十有餘の媼、身の丈拔群にして、眼鋭く鼻の上の皺に惡相を刻み齒の揃へる水々しきが、小紋縮緬のりうたる着附、金時計をさげて、片手に裳をつまみ上げ、さすがに茶澁の出た脛に、淺葱縮緬を搦ませながら、片手に銀の鎖を握り、これに渦毛の斑の艶々しき狎を繫いで、ぐい／＼と手綱のやうに捌いて來しが、太い聲して、何うぢや未だ歩行か、と言ふ／＼人も無げにさつさつと縦横に濶歩する。人に負はして連れた親仁は、腰の抜けたる夫なるべし。驚破秋草に、あやかしのついて候ぞ、と身構したるほどこそあれ、安下宿の娘と書生として、出來合らしき夫

婦の來りしが、當歲ばかりの嬰兒を、男が、小手のやうに白シャツを鎧へる手に、高々を抱いて、大童。それ鼬の道を切る時押して進めば禍あり、山に櫛の落ちたる時、之を避けざれば身を損ふ。兩頭の蛇を見たるものは死し、路に小兒を抱いた亭主を見れば、壽長からずとしてある也。ああ情ない目を見せられる、鶴龜々と北八と共に寒くなる。人の難儀も構はばこそ、瓢箪棚の下に陣取りて、坊やは何處だ、母ちやんには、見えないよう、あばよといへ、ほら此處だ、ほらほらは、は、おほ、と高笑。弓矢八幡もう堪らぬ。よいくの、犬の、婆の、金時計の、淺葱の禪の、其上に、子抱の亭主と來た日には、こりや何時までも見せられたら、目が眩まうも知れぬぞと、あたふた百花園を遁げて出る。

白髯の土手へ上るが疾いか、さあ助からぬぞ。二人乗、小官員と見えた御夫婦が合乗也。ソレを猜みは仕らじ。妬きはいたさじ、何とも申さじ。然りながら、然りながら、同一く子持でこれが又、野郎が膝にぞ抱いたりける。

わツといつて駈け抜けて、後をも見ずに五六町、彌次さん、北八、と顔を見合はせ、互に無事を祝し合ひ、まあ、ともかくも橋を越さう、腹も丁度北山だ、筑波おろしも寒うなつたと、急足になつて來る。言問の曲角で、天道是か非か、又一組、

これまたねいり、之は又念入な、旦那様は洋服の高帽子で、而して若様をお抱き遊ばし、奥様は深張の蝙蝠傘澄して押並ぶ後から、はれやれお乳の人がついて手ぶらなり。え、日本といふ國は、男が子を抱いて歩行く處か、もう叶はぬこりやならぬ。殺さば殺せ、とベツたり尻餅。

旦那お相乗参りませう、と折よく來懸つた二人乗に這ふやうにして二人乗込み、浅草まで急いでくんな。安い料理屋で縁起直しに一杯飲む。此處で電燈がついて夕飯を認め、やゝ人心地になる。小庭を隔てた奥座敷で男女打交りのひそく話、本所も、あの餘り奥の方ぢやあ私厭アよ、と若い聲の媚めかしさ。旦那業平橋の邊が可うございますよ。おほ、と老けた聲の恐しさ。圍者の相談とおぼしけれど、懲りて詮議に及ばず。まだ此方が助りさうだと一笑しつゝ歸途に就く。噫此行、氷川の宮を拜するより、谷中を過ぎ、根岸を歩行き、土手より今戸に出で、向島に至り、浅草を経て歸る。半日の散策、神祇あり、釋教あり、戀あり、無常あり、景あり、人あり、從うて又情あり、錢の少きをいかにせむ。

明治三十二年十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「彌次行《やじかう》」となっています。

※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2016年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彌次行

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>